

記念論集刊行にあたって

このたび、川上勉教授が定年退職をお迎えになるにあたり「立命館法学」別冊として退職記念論集を刊行することができました。執筆者を始め、法学会会員、教育・研究をともにした朋輩後輩の大いに喜びとするところであります。

川上教授は1972年に法学部に赴任されて以来32年の長きにわたり本学において研究と教育に携わってこられました。研究においてはフランスの現代文学、とりわけ大学院でのテーマであったルイ・アラゴン研究を深め、シュルレアリスト、レジスタンス作家、社会主義文学者といった多様な顔を持つアラゴンの本質に迫る論考を著すと同時に、研究領域を両大戦間のレジスタンス文学へと拡大し、文学と思想、文学と政治までを視野に入れた多面的総合的な研究を進めてこられました。85年から86年、92年から93年にかけてはフランスに滞在してレジスタンス文学の研究に専念するとともに資料収集にも努められ、その成果はアンリ・マシス論などを経て『ヴィシー政府と「国民革命」』に結実するところとなりました。この労作に対して法学博士号をおおくりさせていただいたことは立命館大学法学部にとっても大きな名誉であると考えております。

川上教授の関心はしかし以上にとどまらず、日本人としてフランス文学・フランス思想を研究するとはどういうことか、さらには、日本人にとってヨーロッパの思想や文化を体験することはどのような意味を持つのかという問題を常に意識しつつお仕事をされてきたように思われます。とくにそのようなものとして、福沢諭吉のヨーロッパ・外国体験や『高見順戦中日記』に関する論考を私たちは読ませていただきました。

教育の分野においては法学部のフランス語の他に全学副専攻フランス語、一般教養科目の「外国文学」「世界の言語と文化」などを担当されて

きました。川上教授が教育に携わってこられた時期は、ちょうど大学教育が大きな変貌を遂げる中で外国語教育の質が厳しく問われることとなった時期と重なっており、従来の伝統的な文法訳読型の授業に対する批判・反省が一挙に吹き出た時期でもありました。立命館大学では外国語担当教員を中心にそのような批判は批判として受け止めながら、しかし、表面的な「会話力」の養成に墮すことのない真の外国語力を育てる、大学としてふさわしい授業をめざして模索と試行を重ねてきました。川上教授はその中心になって活躍され、立命館大学外国語教育FDプロジェクト編『国際化時代の外国語の学び方』をプロジェクト代表として編集されています。また、93年から96年にかけては外国語教育センター副所長および所長を務め、外国語教育改革の先頭に立って奮闘されました。

学内行政の面では、全学的には外国語教育センター所長の他に学生部次長（現：副部長）を、法学部では学生主事などを歴任されました。とくに私たちがお礼申し上げたいのは、特別の役職にないときでもフランス語部会、法学部外国語部会、さらには全学の初習外国語教員全体のまとめ役としてご尽力いただいたことです。

このような良きメンターとでも言うべき方を失うことは私たちにとって大きな痛手ではありますが、定年後も特任教授として本学の教学をお手伝いいただけることになっており、今後も私たちをご指導ご鞭撻いただけるものと期待しております。川上教授におかれましては益々ご健勝で、研究の面でもいっそうご活躍くださることをお祈り申し上げます。

2004年3月20日

立命館大学法学部長・法学会会長 上田 寛